

# 巻頭の辞

神戸市立病院紀要第 53 巻が発行の運びとなりました。すでに半世紀を超える長きにわたって継続していることは多くの方々のご尽力のたまものと敬意を表します。

ここ数年、初期研修医採用試験に携わっています。受験申込用紙には医師を目指した理由を記載する欄がありますが、ほとんどの受験生が「人を助けることができる」、「病気の人の力になることができる」ことをあげています。「そんなものは受験のテクニックの基本ですよ」と言ってしまうと身も蓋もないのですが、この動機は医療者としての最も基本的な存在意義を示しているものと考えています。

さて、平成 25～26 年度にかけて医学・医療の分野で論文不正が話題になりました。1 つはバルサルタンの臨床研究におけるデータの不正操作です。製薬メーカーの社員が研究に関与してデータに操作を加えて不正な結論を誘導したものであり、当事者の逮捕にまで至っています。製薬会社は大きな利益を上げましたが、利益相反の点からも問題とされ、今後の臨床研究における企業との関係において、倫理面でのさらなる透明性の確保が求められるところと考えます。もう 1 つは STAP 細胞の問題が注目を浴びました。Nature に掲載された論文の主題である STAP 現象の有無については、他の研究者による多くの追試が不成功に終わっていること、また、論文の万能性の証拠となる細胞の画像や、DNA 解析画像の不適切な扱いなどの点が、Web を使った所謂「ソーシャル査読」などから明らかになり、ついには論文取り下げに至りました。バイオ研究は世界的な競争があり、常に成果が求められ、特許取得が要求され、将来の臨床応用に向けた広い視野が必要とされるなど、非常に厳しい研究環境にあると言われています。そのような環境下、専門家が分担して行われた研究でしたが、証明が不十分であり、STAP 現象は仮説に戻っています。平成 26 年 8 月時点では、発表者自身による追試が計画されており、結果が待たれるところです。

本誌には、市民病院群や先端医療センターで、この 1 年間に行われた数多くの研究成果がまとめられています。いずれも職員の努力の結晶であり非常に貴重なものです。今後も医療者として、初心を忘れることなく、医学研究の根本にある目的を大切にして、また、市関連病院の職員としての市民に対する立場を自覚して、診療に、研究に、また教育に努力を重ねていくことが重要と考えます。

西神戸医療センター

院長 深谷 隆